

季節の余白

荒垣秀雄

季節の余白

荒垣秀雄

朝日新聞社

荒垣秀雄（あらがき・ひでお）

明治三十六年岐阜県飛騨神岡町に生る。高山市斐太中学校修了。大正十五年早稲田大学政経学科卒業、同年朝日新聞入社。満州事変特派員、英帝ジョージ六世戴冠式特派員、中国に数回派遣、社会部長、リオデジャネイロ支局長、マニラ支局長、戦後論説委員として「天声人語」を十七年半にわたって執筆、天声人語に対し昭和三十一年第四回菊池寛賞受賞、日本鳥類保護連盟より「野鳥保護推進に多年筆陣を張った」ことに対し感謝状。現在朝日新聞論説顧問。著書、北飛騨の方言、現代人物論、民族の微笑、新聞の片隅の言葉、花も世も人も、自然、戦後世相の流れ、荒垣対談「時の素顔」上中下、その他多数。

書名 季節の余白

定価 三八〇円

第一刷発行 昭和四二年四月三〇日

著者 荒垣秀雄

発行者 朝日新聞社足田輝一

印刷所 図書印刷株式会社

発行所 朝日新聞社 東京 名古屋 大阪 北九州

© 荒垣秀雄 一九六七年

目

次

春

もぐら抄

ひな祭の心

路のとう

柳を見直す

川と旅情

さくらの維新

新芽を愛す

宿のスリッパ

双ヶ岡

花のいのち

鯉のぼり

愛鳥週間

街路樹公園

五 五 四 四 四 三 三 二 二 七 三 九

夏

野鳥の巣箱	花の性道徳	鵜飼	蟬のいのち	郭公の歌	梅雨譜	松を救え	蛙の歌	螢の恋	花菖蒲	天敵	鮎	花水木
-------	-------	----	-------	------	-----	------	-----	-----	-----	----	---	-----

二〇	二六	一〇三	九	四	九〇	六	八	七	三	充	奎	六
----	----	-----	---	---	----	---	---	---	---	---	---	---

秋

蜘蛛の纖維工場

こおろぎ経

野分のうた

カラスの雌雄

彼岸花

名月や

モズの知恵

並木の秋

紅葉の魔法

川の本能

秋の“新緑”

隅田川の蘇生

鳥獣の“聖域”

二七

二三

二五

二九

三三

三七

四一

四五

四九

五三

五七

六一

六五

冬

くだもの王国	二七一
野鳥の訪客	二七一
つけ物の味	二七一
九州路の旅	二八三
冬至と降誕祭	二八七
こぞ・ことし	二九二
ひつじの歌	二九五
歌になる魚	二九八
風よあがれ	三〇三
冬晴れの空	三〇七
コヨミのない暦	三一一
あとがき	三二七

挿絵

装本

山口蓬春

小糸源太郎

加藤栄三

望月春江

東山魁夷

杉山寧

石井鶴三

高山辰雄

片岡球子

橋本明治

原弘(NDC)

春

もぐら抄

朝起きて見ると、庭のあっちこっちにモグラの土まんじゅうがボコボコと噴火山状にもちあがっている。せっかく丹精した芝生がメチャメチャに荒される。土のない団地生活のことを思えば、狭いながらも庭を持つ者のぜいたくな嘆きかもしれないが、モグラにはまったく泣かされる。農家でも農作物の根が浮きあがって、モグラ禍には手を焼いている。古くから農村にある「もぐら打ち」の行事もその悩みを物語っている。

モグラ退治にはばくもいろいろ苦心したが、素人の無知をさらけ出してコツケイなことばかりやってきた。初めは「洪水作戦」を試みた。ホースで水をジャンジャン穴に注入して、モグラをおぼれ死にさせようというわけだが、いた

ずらに水道のメーターが上がるばかり。次はBHCの粉や石油乳剤を大量に水で流しこんだ。さぞや鼻をつまんで来なくなるだろうと思ったが、これもダメ。臭いトンネルは一時放棄するらしいが、すぐ別の地下道新幹線をドンドン掘ってくる。

こんどはジャガ芋、サツマ芋の中に猫イラズをつめたのやネズミ取り団子を穴に入れてみた。これもモグラの生態を知らぬ無知な作戦だった。辞典をみると、モグラは食虫目で動物質しか食べないとある。ミミズ、ケラ、昆虫の幼虫など生きている地虫が常食らしい。クモ、ムカデ、蛙、カタツムリも食べるそうだ。「いい方法を教えてあげよう」と、さる高名な評論家先生が妙策を授けてくれた。使用ずみの安全カミソリの刃を土中にザクザクと埋めておくと、モグラのやつ、鼻っ先を切られて来なくなる、という珍学説である。ためしてみたが、刃ごとボコボコと土まんじゅうをもち上げてきた。人間って案外バカだなあと、土中であざ笑っているにちがいない。

結局、金物屋からモグラバサミというトラップを買ってきた。

一匹一殺主義に作戦転換である。シャベルで噴火口を掘って手を入れてみると両側にトンネルの口がある。塗り固めたような「ベトコンの地下道」だ。その出入口にワナを仕掛けて、光がささぬようにフタをし、翌朝あけてみると一匹かかっていた。ビロードのような美しい銀灰色の毛、シャベルみたいな大きな前足が赤くて可愛らしい。地下の暗黒生活で目は退化し皮下に埋没している。外耳もない。口吻こうぶんと爪が鋭い。

モグラは大食漢で一日にミミズを五、六十匹も食うそうだ。実験によると自分の体重と同量くらい毎日食べるという。五、六月に二匹から五匹の子を生み、八月ころには成獣と同じ大きさになるそうだ。寿命は五年もある。とても一匹一殺主義ではラチがあかない。本によるとモグランというBHCやクレゾールの混合錠剤を庭の周囲にうめると一カ月ほど来ないそうだが、恒久策にはならない。たまたま電車に乗合わせた梶浦さん（当時、平塚園芸試験場長）にお知恵を拝借した。わが家のモグラの巣は西隣の松林にあるとの判定で、その境界に一メートルくらいの深さで金網を張ってごらんさい、と指示された。その

下からもぐってきませんかと伺ったら「モグラは地虫を食べて生活している。地虫も酸素がなければ生きられない。地下の深い所には酸素がないからミミズも生息できず、モグラも地虫のおらぬ深さにはもぐらない」。

さすがに専門家の話は科学的だ。さっそく鶏小屋用の金網を数十メートル買ってきて「土中の防壁」を築いた。

効果てきめんだった。金網で巢に帰れなくなった迷い子のモグラが二、三回土をあげたが二匹ばかりワナでとってからもう数カ月も出ない。敬して遠ざけたわけだが、殺生しなくてすむのは助かる。やれやれである。

ひな祭の心

三月三日のひな祭がくると、ぼくが子どものころ、世の中には貧富の差とい

うものがあるのだなと幼な心にもハッキリと刻みつけられたことを思い出す。

旅人の窓よりのぞくひひなかな

白雄

この句のように、見知らぬ人がわが家をのぞきこんで「この家のはデンコサマばかりじゃな」と冷笑しながら立去った。デンコサマとは安物の土びなのことである。ぼくはひどく自尊心を傷つけられたが、よその家のも見たくなくて数人の友だちといっしょに見て回った。ぼくの郷里は飛驒の山奥の小さな町だが、山持ち、田地持ちの素封家の家について見ると、座敷の天井までとどくような大きな御殿じてんびな雛がいくつも並び、金屏風に照り映えてまぶしいばかりだったのには驚いた。ほかの家へいくと紙びな、土びな、デクびなであったり、錦を着た坐りびなでも鼻が欠けたり、胡粉がはげていたり、粗末な古びなの家も多かった。男の子のくせに、羨望と反感を覚えたり、ちよっぴり安心もしたこと

を思い出す。

正岡子規の句に、

雛あらば娘あらばと思ひけり

とあるように、子のない家、男児ばかりの家庭では、桃の節句になると娘の一人もほしいと思うのは実感だろう。女の子のお祭としてひな祭ほどやさしく優雅な行事は世界にもまれなのではあるまいか。高野素十さんの「野に出れば人みなやさし桃の花」という俳句の通り、ひな祭にはじまる三月はなんとなくやさしく、人の心のなごむ季節である。

それにしても、ひな飾りは年々華美をきそって、若い親には手のとどかぬ高根の花になった。

おひなさまが初めから全部そろわず、年ごとに少しずつふえていくのはゆかしいものなのだが……。そして幼い子が手をふれても母親にしかられる高価なものより、いじつてもよいことのほうが子どもにとって楽しく仕合せなのだともいえよう。

もともとひな祭の起りは「流しびな」であつたようだ。人間の姿をした人形ひとがた